

長編痛快推理

翔んでる警視正 2

胡桃沢耕史



天山文庫

と
翔んでる警視正 2

著者——胡桃沢耕史

発行者——服部将太

発行所——株式会社天山出版

東京都文京区本郷2—3—9 〒113

☎03(818)0434

発売所——株式会社大陸書房

東京都文京区本郷2—3—9 〒113

☎03(814)7441〔営業〕

郵便振替 東京1—56612

FAX 03(814)5890

印刷——株光邦

製本——小林製本所

乱丁・落丁のものは、小社またはお買い求めの書店にてお取
替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©KŌSHI KURUMIZAWA 1989

PRINTED IN JAPAN

ISBN4-8033-2203-1

天山文庫

翔んでる警視正²

胡桃沢耕史



TENZAN BUNKO

目次

死体が並ぶお正月	5
犯人は皆さんです	50
東京機密報告	95
捜一に迷宮はない	140
コンピュータの反抗	185
犯人が必要ですか	230

死体が並ぶお正月

死体現象（死斑）

現在のところ死とは、心拍動、呼吸運動、脳機能などの永久停止が明らかになった場合と定義されている。

死亡と同時に体内の熱生産が止まるので、体温は漸次^{ぜんじ}下降し、周囲の温度と同じになる。冷却の速度は着衣、年齢、体格により違ひ、殺害された者と病気による者の死亡によっても差がある。

最初に死斑が体にできる。これは血液が自己の重量によつて体の下部に沈下するせいで、^{ぎよう}仰臥位では背部、下肢の後部にできるが、後頭部、臀部など床にじかに接触している部分には現れない。

死後、二十分、三十分で赤紫色の斑紋として現れ、二時間後に著明となり、十二〜十四時間後が最も強くなる。

死後十時間以上になると体位を変えても、死斑の位置は変わらないので、死斑によってどのような姿で殺され放置され、死亡後、どのくらいの時間がたっているかを、判定することができる。

1

広い警視庁の中だ。

正月になると、逆に忙しくなる組と、一応、他の官庁や会社なみに、三が日ぐらいは、自宅で屠蘇酒とそをくみ交わし、家族とゆつくり団欒だんらんできる者とがある。そのときの所属部署の違いで、暮しの明暗を分ける。警備部などは、どちらかという突発事故が少なく、予め決められた行事日程に従って、規則正しく働いていればいい部署だから、平日は交替に休みが取れるのであるが、正月の三が日は逆に大変だ。明治神宮という、日本一参詣人の多い神社を本庁は抱えている。大晦日おおみそかの夜から、全部員を動員し、更に各部からの応援も借りて人員整理をやらなくてはならない。その間に二日は皇居の参賀もある。まさに暮も正月もない忙しさだ。

それに比べると、いつも何かと事件に追われて殺気だっている捜一は、正月だからといって別に特別のことではない。

仮に事件がなければ、（あくまで仮定であるが）三が日をゆつくり自宅で過ごすことができ

るのだ。

これまで、岩崎白昼夢^{さだむ}が、警部で捜一に来てすぐ警視に昇進して五年、一度としてそんなのんびりした正月を過ごしたことはなかったが、たてまえではそうなっている。そして今年の警視正になって初めての正月は珍しく、この三が日は、本庁へ出ずにすんだ。

ところでこの仕事始めの四日というのもまた、その年の運が大いに影響するもので、土曜日だったりすると、また二日続いて休んだりする会社もある。警視庁であつても一般事務の職員は、そういう恩恵に浴する人もかつてはいたが、せいぜい一般警官は五日にもう一度、屠蘇の飲み直しができる程度だ。

ところが今年のように、四日が月曜日となると、これはもう掛値なしに、正月早々、張り切りざるを得なくなる。

三が日を珍しく、非常呼び出しもなく休めた。だから四日の八時半に集った、捜一のみなの表情は、きりつとひきしまつて、爽やか^{さわやか}であつた。外の天気も元日同様晴れている。

八時半、庁内のベルが鳴る。

全員が起立する。各部屋にあるスピーカーから、総監閣下の新年を迎えての、恒例の訓示がある。

今年は、暴力団の一掃、公安関係犯罪の絶滅、凶悪殺人犯の根絶及び早期検挙の徹底、とい

う三大方針についての説明があり、本庁十八階の高い庁舎内にいる、四千人の警察官は、覚悟を新たにした。短い訓示が終わり、全員が一斉に新年の挨拶をした。

「あけましてお目出とうございます」

机に座る。忽ち、いつもと同じ、厳しい捜一たちまの一日が始まった。まず二係の女性の乃木刑事が、湯沸かし室に行つて、大きな薬缶やかんにお茶を入れてぶら下げて来る。もう彼女も、この捜一に入つて五年、成人式を終えてすぐ回されて来たのが、見習いを経て、巡査長の一人前の刑事で、二十五歳だ。よその所轄から、この鬼の捜一にやつて来た後輩の刑事に、お茶汲みの仕事はやらせた方がいいのだが、どうしてもこれだけは、他人に任せられない。

事実一係にいる若手の女性の原田刑事や、男性でも武藤、中山などの後輩の刑事さんがやつたのでは、お湯呑み茶碗に上手に一本、茶柱が立たないのだ。

普段の日ならまだしも、今日はお正月の仕事始めの日、その最初の日には縁起のいい太くてまっすぐな茶柱を一本立ててやりたい。

いくら新年だからといって、捜一は殺人専門だ。事件がなくて座っているのがお目出たいわけでない。残念だが殺人が起こった時、岩崎警視正がただちに出勤し、鮮やかに犯人像を割り出し、水も洩らさぬ包囲陣で犯人に迫り、あつという間に逮捕し、絞首台に送る。これがお目出たいのであつて、新年でも吉日でも、可愛い丸顔の乃木刑事の毎日のお茶配りには、今日も

立派に殺人事件が解決されますようにとの思いがこもっている。

まず第一番目には、かつての憧れの人だが、今は可愛い翔ちゃんまでできてどうすることもできない、岩崎管理官殿のデスクに行く。うやうやしく挨拶した。

「お目出とうございます」

「うん」

相変らず、彼はもうコンピュータの端末機を睨んでいて冷たい表情のまま顔を動かさない。お正月だからと薄くひいた口紅には気がついてもらえないだろう。これはいつものくせだから気にしないことにした。

「失礼します」

そう言つて横からお茶を注いだ。それから入れた自分がびっくりして、乃木は、
「あら」

と小声で言った。これまで彼女のお茶入れは、神技に近かった。いつの朝も、きちんと一本、形のよい茶柱がお茶碗の真ん中に立つ。

気にしていないふりをしながらも、案外、岩崎警視正も気にしていて、それをちらと横目で見て、それから朝の始業前の熱いお茶をゆっくり飲む。

普段なら、そのまま、今度、二係長に着任して来た、若い村松警視のデスクに行き、二番目

にお茶を注ぎ、以下進藤デカ長、武藤刑事など、顔なじみの間を注いで回る。

岩崎管理官は、一係と二係との両方を率い現場指揮に当る、昔より一つ上の役についた。一係の係長には、九月から十一月までは、公安から臨時にやって来た警視がなった。これは皇室関係の特別警備に、捜一の殺人係の刑事まで公安の仕事に動員しようとして、キャリアの中でも切れると評判の佐野警視を回してよこしたのだが、あくまで殺人事件の解決が本筋だと主張する岩崎管理官によって、その多少 よこしま 邪な公安の意図は阻まれ、十一月末日の、特別警備期間終了とともに、佐野係長はまた公安のデスクに戻っていった。代りに、以前、岩崎警視正が辿みって来たのと同じように、若手の上級職試験合格者で、パリの『イ国際刑事警察機構ポ』の海外研修を終え、本庁内でも主要各部課を短く、一回り、実習して来た若い警視の中で、最も肝の座った、大物になりそうなのが回されて来た。

十二月の初め佐野警視に代って一係長に、少しやせぎすで、神経質そうな高橋警視が着任すると、同時にこれまで、管理官の岩崎警視正が兼任していた二係長も新しく若い村松警視が着任したのである。

それで、乃木の薬缶の中のお茶は、岩崎管理官のデスクから、いつもならそのまま、村松係長のデスクに直行するのである。

この二人の若手係長の着任により、彼らの未熟な能力を補充する意味で、内部で机の入れ替

えが行なわれ、これまで二係で岩崎警視とともに長く協力してやって来た、吉田老刑事、もう一人の女性の原田刑事、ピストルの上手な中村刑事は、一係に回された。

それらのデスクには、乃木の薬缶は出むかない。

ちゃんと一係の新入りの刑事（と言っても所轄を出て、八年やって来た中堅）が、薬缶を持つて歩く。

一係の方はどうせそうちゃんとした茶柱など出っこないのだから、どんどんお茶つぎが進んで行くのに、今日、一月四日の仕事始め、乃木の薬缶は、これから二係長村松警視のデスクに行くところを、

「あら」

の小声とともに、岩崎管理官のデスクで止まってしまった。

いつもと全く違う茶柱だった。中ぐらいのが二つ周りに浮かび、真ん中に形の醜いよじくれた太いのが一本やや横倒しに近い形で浮いている。

どうも兇事を連想させる不吉な形だ。

しばらくして、乃木が言った。

「すいません、入れ直しをしましょうか」

「いやかまわん。天の指示だ。何かあるんだろう。それに従おう」

コンピュータを自由自在にあやつり、近代的なハイテクの機構に通じている岩崎警視正も、乃木の茶柱が出す兆候については、決して頭から無視はしない。

「私のことは分った。ともかくそのままお茶をついで回りなさい」

そう言われて、乃木がもう一度ぺこりと頭を下げて、薬缶を二係長の、いかにも健康優良児で、良家の子弟がそのまま大きくなったような村松係長のところに下げて行つて、その茶碗に入れた。とたんに電話が鳴った。

それでよかった。

もしまだ岩崎警視正の机の横にいるとき電話が鳴つたのなら、責任とショックで乃木は薬缶を取り落とし、熱湯が足にひつかかつて大火傷するところだつたらう。おおよけど

岩崎は取り上げる。

「警視正殿おられますか」

「私だ」

声で岩崎は相手が誰か分つたが、気難しい端正な表情は崩さない。夫婦同じ課の同室で勤務するのは好ましくないという上司の判断で最近はまだ捜一課長秘書室にいる、妻の岩崎みずえ警部補である。

「岩崎警部補であります。急報を伝えます」

向うも端正な他人行儀の口調を崩さない。

「……二係から先にすぐ、大森方面へ出勤、大森駅前、ラブホテル街にある、ホテル・エストリヤ内にて、殺人事件らしいと思われる事件が発生、誰もまだ部屋に入らず、ホテル周辺は所轄大森署が、出入りを禁止して、捜一の出勤を待っています。同時に一係は^{おおたるみ}大垂水峠に出動してください。全員が公用バスで、鑑識係を乗せて出勤。管理官殿は、携帯無線機を持って、この一係と二係の指揮を同時に取ってください」

話をききながら、既に岩崎はいつも机に置いてある東京及び近辺の道路地図を拡げていた。大垂水峠の位置は分った。甲州街道沿いの殆ど東京の外れ、もう少しで山梨県との県境にある。

街道の右側だ。

一係と二係とを出すとすると、どちらも、岩崎管理官の直接指揮下の係だ。しかし、一方は都内の大森、一方は山梨との県境の山の中、どちらも事情がよく分らないが、殺人事件らしい。この二つをどうして、同時に指揮することができるのか、少し無理なような気がする。

一課長が自分で直接電話をかけてこずに、みずえ警部補を通じて二事件の同時出勤を命じて来たのは、岩崎にいつまでも現場の捜査官としてでなく、一つ上の総合的観点から、現場を指揮できる能力も勉強しなさいという意味も含んでいるのかもしれない。

「分りました。岩崎管理官は、一係、二係とも現場に率い、両事件を同時に捜査し、同時に早期の解決に努力しますと、警部補から課長殿にお伝えください」

と、今朝までは、しっかりと抱き合い、朝の出がけには、マンションのエレベーターの所で、ともに可愛い一子、翔に頬ずりして来た妻に、全く他人行儀の声で伝えた。これは、公務中だから、当然ではある。

電話が終わるとすぐに、

「高橋係長と、村松係長」

と呼んだ。その声が緊張している。一見冷静に見えても、昔からの部下には分る。とたんに、それらの子分たちは、獵犬のように、耳をとがらせて、待機の姿勢を取った。

二人の若い警視は、今や伝説ともなっている捜一の名捜査官岩崎警視正の前に、不動の姿勢で立っている。

「二人とも出動だ。先に二係だが、二係は大森署管内のラブホテルだ。私が一緒に行き、捜査の指揮を取る。村松係長は今日は捜査実務の何よりもの勉強と思って、私のそばにぴったりついていてくれ。新年早々、殺人事件があり、君はついていて。年男かね」

「はい辰年であります」

「それは目出たい」

どうも捜一にいと少し感覚がおかしくなってくる。

「同時に一係長は、全員をバスに乗せて、甲州街道を、相模湖に向ってまっすぐ走る。これは遊びでない。白バイを二台先頭に立てて、できる限りのスピードを出して急行する。相模湖の少し手前に、道が九十九折^{つづら}りになっている場所がある。高尾山の麓^{ふもと}に当る大垂水峠だ。

そこで道路際に警戒線が布^しかれ、山梨県警と相模原署の所轄巡査が待っている。着いたらただちに、捜査にかかりなさい。もつとも君たちが現場に到着するころには、もう私が先に行っていて、捜査を始めているかもしれないがね」

いくらか神経質そうな高橋一係長は、

「えっ、どうして先に行っておられるんですか」

と不思議そうにきいた。岩崎はあつさりと答えた。

「私に翼でもあると思ってもらおうか。ともかく全員出動だ」

と、命令を出した。捜一の大部屋の右端に位置する、一係、二係は騒然とした。残留の連絡デスク要員を除いた他の刑事たちは一斉に出動の体制に入った。

一係の吉田老刑事は、車輛係にバスの手配を命じ、ただちに現地相模原署、山梨県警とに、只今から捜一が出動するので、それまで現場に手を触れぬよう要請する。

本庁捜一の要請は絶対だから、この時点に於^{おい}て、大垂水峠の殺人現場の保全と、現場に到着